

# モード Mode は語る

中野 香織

新しいファッションが生まれる主要な原動力に、反逆心がある。規範や常識の押し付けに対する抵抗。飼いならされることへの拒絶。主流文化に対する宣戦布告。クールである。ファッション史が面白いのは、趣味の悪さのそしりをうけても、見た目を通した反逆のインパクトによって、文化および制度を覆していくことができるという事例を見る時である。

その意味でもっとも興味深いのが1960年代ロンドンなのだが、それを同時代人の目から生々しく描いた傑作の日本語版が出版された。「誰がメンズファッションをつくったのか？」(DU BOOKS=写真)。71年に出た伝説の名著の復

## メンズファッション

## 原動力は反逆心

刊で、著者はロック・ジャーナリストの父と呼ばれるニック・コーン。戦後から70年までの25年間をロンドンのストリートシーンを作り出したデザイナー、店、仕掛け人、スターを通して描きつくす。

テッズ、モッズ、スキンヘッズ、ヒッピーなどのおなじみのサブカルチャーの数々と、サヴィル・ロウ、ハーディ・エイミスといった保守的で伝統的な権威、およびイタリアンルックの襲来や外国人観光客による「観光汚染」との関係が、人や店を介して立体的につながっていくポップなドライブ感といったら。なかでも60年代の描写に活気があり、喧騒(けんそう)の一大絵巻を読み終わるころに



は、文化はどのように変容を遂げていくのかという問いのケーススタディーにもなっていることに気づかされる。

得心がいったことのなかに、A地点からB地点へという直接移動がほぼ不可能であるという「公理」がある。突破口を開くには、まず前衛部隊がジャンプしてC地点まで行く。そのままD地点に突っ走る人もいるが、大多数はほどほどのB地点に戻り、ジャンプしなかった人もBで合流する、と。こうして文化はAからBへと変容を遂げる。BがAより良いとは限らないこと、真の意味での変容ではないかもしれないことまで示唆される。

50年前に書かれた本だが、今の感覚も共有できる。ジャンプしても「結局、世界は変わらなかった」という虚無感に襲われる現実も多いことを、ファッション史は苦く教えてくれる。(服飾史家)